

コロナ禍において保育者養成校が地域子育て支援事業を行う意義 ～ 2020 年度「光華こどもひろば」の実践から～

和田 幸子
下口 美帆
山崎 玲奈

キーワード：保育者養成校・子育て支援・コロナ禍

要旨

京都光華女子大学こども教育学科で取り組んできた地域子育て支援「光華こどもひろば」は、1,2年生の授業との連携を特徴として活動を続けてきた。本稿では、2020年遭遇したコロナ禍で、休止期間を経て代替え活動としてオンライン配信を行ったこと、また対面再開に向けて整備したことを整理する。親子のニーズを探り、わかりやすい内容、形で発信しようとしたオンラインミニ子育て支援講座や特別企画は、保育者養成教育の中での教材研究のあり方に示唆を与えるものとなった。そして、参加人数の見直し、保育環境設定、受付業務の簡素化、広報の工夫を行い、学生は企画、準備を重ね、1年ぶりに対面開催を実現させた。この経験は、今後、保育者養成校が行う、アフターコロナ下での新しい子育て支援事業の実際を構築していく上での基盤となるであろう。

I. 背景と目的

2020年のコロナ禍のもとでは、授業実践、活動の変更、改革が迫られたのであるが、京都光華女子大学こども教育学科（以下、本学、本学科と記す）で授業と連携をとりながら実施してきた地域子育て支援事業「光華こどもひろば」（以下、光華こどもひろばと記す）も、開催をめぐって変更判断を要することになった。本稿では、この1年間のそれぞれの時期に下した判断とその内容、つまり休止期間を経て代替えでオンライン配信を行ったこと、対面再開に向けての経過を報告する。制限下で、地域および保育者養成課程の学生にとっての最善は何かということ熟考し、判断し実

践した、非日常事態での実践記録である。

2018年施行の現保育所保育指針において「子育て支援」の章が設けられ、また同年施行の現幼稚園教育要領においても、「子育て支援のために」という文言が記されるように、今日の保育者にとっては、子育て支援を視野に入れた保育実践は必須である。保育者養成校において、授業と連動した形で子育て支援事業の展開に力を入れている事例があり、その報告が参照できるようになってきている。入江は、保育者養成校での子育て支援の実践は、教室型、ひろば型、派遣型に分類できるとし、保育の原型を学べる機会であることを強調すべく、これらの活動を「保育・子育て支援」と呼んでいる（入江他 2017）。教室型というのは、親子遊びの教室、ワークショップを定期的に行うスタイルである。ひろば型は、親子が自由に集い交流するスタイルである。そして派遣型は学生および教員が地域に出向き親子活動の場を支援するというものである。

本学科幼児教育コース教員は共同研究として、2018年度、東京都と大阪府にある保育者養成校の子育て支援の取り組みを見学、インタビューする機会を得た¹⁾。そのことにより本学科の取り組みと比較することで、光華こどもひろばは下記のような特徴があると整理した。一つには、光華こどもひろばは、ひろば型と教室型の融合型であるということである。光華こどもひろばは開催日時を広報するのであるが、参加者登録制をとっておらず、クラスやグループといった枠も設定していないゆえ、開催日ごとに集まる参加者が異なる。これはひろば型としての特徴である。一方、90分間の開場中には、部分設定保育を行っている。これは参加者同士の交流、参加者と保育者の交流を積極的に生むひとときである。これは教室型としての特徴である。つまり、光華こどもひろばは登録制を取らないひろば型であるが、同時に教室型でもあり、このことにより、

参加者は、自由度の多い中、参加者同士が交流をもつ機会を得る。

二つ目には、光華こどもひろばと授業との連携である。特に、1年生後期、2年生前期の科目から連携科目を定め、事前事後学習を行い、学生が光華こどもひろばでの保育参加経験と学修とを有機的に往還する仕組みを作ってきたことであろう。保育者養成校で行なう子育て支援事業は、授業との連携について、各校ごとに特徴的な取り組みがある。先にあげたインタビュー校の一例では、3,4年生の選択科目として設定し、子育て支援を演習として学びながら子育て支援事業の運営がなされている。これは学生の主体的な運営と充実した学修の場となっている。もう一校の例では、学年を越えた選択演習として子育て支援の科目を開講しており、選択した学生は4年間継続して子育て支援の学習と取り組みを経験する。このように両校の取り組み内容は非常に充実しているものの、この科目を履修しない学生は、在学中に子育て支援の実際を全く経験しないままであるという状況も含んでいるのである。対して、本学科においては、1年生後期、2年生前期の少なくとも2回に、全員が順次光華こどもひろばの保育を経験する、ということに特徴があるといえる。しかし保育者養成の初期段階であることから、教員が主導的になっていることも否めない。

以上、光華こどもひろばの特徴、長所と課題点を明らかにした時点で遭遇したコロナ禍であった。2020年度初頭はまず開催中止とした。それ以後の判断と経過については、以下に報告するが、最も困難な状況の最中において、他校の様子を参照にすることはなかったのである。実際のところ、本学科と、地域の状況、ニーズは何かということを問うことに精一杯であった。状況が落ち着く兆しが見えたころ対面開催を計画する際に、上記のインタビュー校のうち一校と連絡をとり情報交換をしたのであった。

さて、2021年5月にオンライン開催された日本保育学会において、保育者養成校におけるコロナ禍での子育て支援事業の実際について、東京家政学院大学と共立女子大学が共同報告をしている(柳瀬他2021)。連携する科目の4年生履修生が、登録の親子に向けてオンラインによって遊びの紹介をした東京家政学院大学の事例、3,4年生履修生が登録の親子に工作キットを郵送することを経て、後期からは対面での活動実施

した共立女子大学の事例が紹介された。両校ともに、これまで積み重ねてきた子育て支援事業での保育内容を対面以外でできる具体的な方法、つまりオンラインや郵送で発信したことがわかる。コロナ禍という非日常事態に遭遇した際には、全く新しいアイデアがなされるのではなく、常日頃の実践を基軸にして、工夫した代替え実践がなされるということを示した報告であった。

本稿では、2020年度光華こどもひろばの実際と学生の学びとを報告する。また2021年度の対面開催再開に向けて再考、設定したことを整理する。そのことによって、保育者養成校で行う子育て支援事業の今後の在り方を検討し、課題を提示することを目的とする。

II. 方法

まず、2019年度までの活動経過概要を記す。そのことによって、光華こどもひろばの運営の特徴と課題を提示する。そして、2020年度に実施した代替え活動と、対面開催再開に向けた検討内容を記す。再開に向けて、これまでと変更したことに着目し、今後の光華こどもひろばのあり方について再考を試みる。

III. 2019年度までの活動経過概要

月2回、子育て支援事業光華こどもひろばを学科教員で協同的に運営、開催しており、学生は1年次後期、2年次前期に連携科目授業内での準備を経て8~9名ずつ保育参加してきた。そして、光華こどもひろばに参加する2~3組の親子を授業に招く子育て交流会を、前期、後期それぞれ1回ずつ行ってきた。

1. 光華こどもひろばの開催と実際

こども教育学科の前身である短期大学部こども保育学科の時代より、年に数回、おたのしみ劇場を開催し、観劇、身体遊び、絵本の紹介と読み聞かせ、といった内容で子育て支援活動をしてきた。同時に、京都市右京区にある三条商店街振興組合との連携協定により、商店街振興事務所へ教員と学生が出向いて子育て広場を開催してきた。この後、大きく舵を取るきっかけは、本学内慈光館1階に保育実習室が開設されたことであった(和田他2015)。2013年度より保育実習室にお

いて月2回の光華こどもひろばが開催されるようになり、年度ごとに決めた科目の授業と連携し、学生が保育参加する体制へと整えていった。そして、2015年のこども教育学科開設以降も、オープンキャンパス日を含む月2回の開催を継続している。

2019年度は、年間20回開催した。未就園児とその保護者を対象とし、自由遊びと学生による部分設定保育を内容としている。また、3回は特別企画として「こどもまつり」「おもちゃ講座」「おたのしみ劇場」を実施した。いずれも10時30分から12時までの90分間の開催である。これらは、本学が所在する五条葛野大路の交差点のポスター、京都市の右京区役所・右京区警察署等に配布依頼している案内パンフ、学科ブログによって広報し、申し込みなしで自由に参加できる。平均参加数は13家族であった。こども教育学科教員2～3名、非常勤保育士2名、学生参加7～8名で運営した。

親子の多くは、親子で遊べる場、安全な場、おもちゃが整っている場を求めて、ポスターやブログで光華こどもひろばのことを知り、または口づてに情報を聞いたことによって来会される。事前申し込みが不要であることは、幼い子どもを育てる親にとってはその日の子どもの状態、天気に応じて参加を決められるという利点があるだろう。自由に遊ぶわが子を見ながら、保護者同士が情報交換をし、参加の保護者の多くは笑顔で過ごしている。継続して参加される親子が多く、場に慣れてくると落ち着いて遊び、また子ども同士の関係性も徐々に育まれてくる。そんな中、参加人数が非常に多くなる日も度々あった。そこで本学科幼児教育コース教員は、事前申し込み制とし、定員を定めたほうがいいのか、という議論を重ねてきた。しかし、子育て中の保護者にとってはニーズを感じるタイミングがあり、その日に参加したいと感じている親子を受け入れられなくなることから、これらの判断に慎重になった。我々教員は、ひろば型と教室型の融合型であることの意義を感じており、定員を定めて教室型に移行にするという判断は先延ばしにしてきたのであった。そして結局は、参加の多い日もあれば、それほど多くない日もある、ということが繰り返された。二人目、三人目の子どもが生まれ、数年間続けて参加される方もいれば、育休を終えて復職し保育所へ進む方もいる。このように年度ごとの歩みを重ねてきた。

2. 授業と光華こどもひろばとの連携

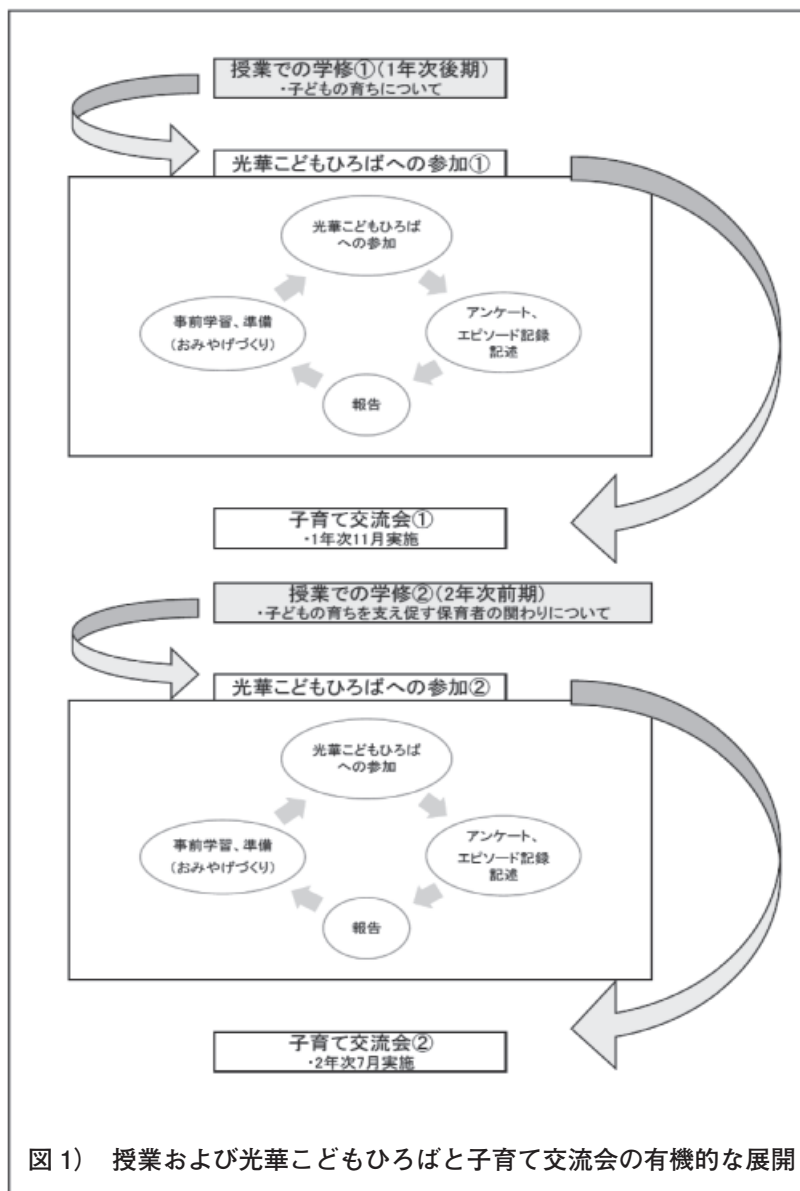
短期大学部から引き継いだことから、1,2年生の学生が光華こどもひろばの保育参加をすることは自然な流れであった。幼児教育コースの1年生学生の多くは、1年後期から光華こどもひろばに保育参加をすることを期待して待っている。そして、1年次後期「乳児保育Ⅱ」で、0,1,2歳児の育ちやその保育方法を学びながら、光華こどもひろばへの参加の準備をする。具体的には、子どもたちに渡す簡単なお土産物の制作、乳児用の手遊び・絵本・紙芝居の教材研究と実演練習である。

このようにして学生は、配属日に光華こどもひろばへの保育参加をする。0,1,2歳児の子どもの動き、声の出し方、保護者との関わりを観察しながら、自らも子どもに関わろうとする。終了後は、用具の消毒と片づけを行い、記録にエピソードと考察を書く。次回の授業では、皆の前で保育参加の様子を報告する。この一連のことは、保育者養成教育課程の初期段階にいる学生にとって、新鮮な経験であり、子どものことをより知りたい、より親しくなりたいという思いを抱く機会となる。

2年次前期にも光華こどもひろばへの保育参加の機会を持つ。2回目であるため、子どもの育ちを支える保育者の関わりを経験すべく、部分保育指導案を作成して当日を迎える。0,1,2歳児と触れ合い、保育実践をすることと、授業での学習内容と照らし合わせを行っていく。さらに春休み、夏休み中の開催日の保育ボランティアも含めた保育経験をもとに、学生は幼稚園、保育所での実習に臨んでいく。

3. 子育て交流会について

光華こどもひろばに参加する2～3組の親子を授業に招く子育て交流会を2016年度に試行的に行った²⁾。開催の動機は、学生の保護者理解を深めるためであった。子育て交流会では、傍らで子どもが遊ぶ姿を見ながら、保護者に子育ての実際について話を伺う。例えば、妊娠中の心身の変化、出産、子どもが生まれてからの生活、子育ての喜びと苦労、このような話を、来会の保護者に話していただくのである。学生にとっては、初めて聞くような内容も多く、子ども理解、保護者理解を深める時となる。また、子育て中の親子にとって光華こどもひろばが子育て支援の場となっているこ



とも知ることができる。終了後、学生は親子へのメッセージを表す文言を探りながら感想をカードに記し、贈ってきた。

子育て交流会は、来会の保護者にとっても有意義であった。学生に語ることで、子育てに懸命の日々を振り返る機会となる。自己の経験が保育者養成に貢献できているという自己肯定感を得ることができる。

このように子育て交流会は、学生にとって、そして保護者にとって、非常に有意義な機会であるといえる。そこで授業から光華子どもひろばへの参加を経て子育て交流会を開催するというサイクルを1年次後期、2年次前期の2回展開させてきた(和田2020)。これは本学科独自の取り組みとして定着してきた。

以上、光華子どもひろばと授業との連携、および子

育て交流会の有機的な展開について図1で表す。

IV. 2020年度の活動

1. 開催見送りの期間とオンラインに向けての準備

2020年2月にはコロナ感染状況が深刻化しており、翌月初めには、3月20日に予定していた2019年度最終の光華子どもひろばを開催中止する判断をした。新年度を迎えてからも、開催予定日を公開することなく、「日程や実施方法について検討しているところです」「今しばらくお待ちください」の案内を広報した。そして緊急事態宣言が解除される日を待っていたわけであるが、かつて経験したことがない状況を経た後の光華子どもひろば再開には、多方面の調整が必要であっ

た。まず学生の対面授業再開を整備することが喫緊の課題であり、再び、学外から親子を迎えるための状況整備には、時期を要することとなった。

この間、学生に対してはオンライン授業内で、前年度の光華こどもひろば活動を紹介した学科ブログの閲覧を勧めた。学生のオンラインレポートでは、再開を待ち望む声が多数書かれていた。それにより、筆者らは現状の中でも、歩みを止めず、保育者養成校が行う光華こどもひろばとして何らかの発信をしなければならない、という気持ちへと駆り立てられた。そこで、①短時間で視聴できる、②室内で親子で楽しめる遊びのアイデア、をオンラインで配信することにした。これは「オンラインミニ子育て支援講座」として、学科ブログに動画をアップする方法で行なった。これまで保育実習室で行ってきた部分設定保育に替わるもので、学生が親子で楽しめる遊びを紹介する、という設定で動画作成をしたいと考えた。もう一つ考えたことは「オンライン特別企画」である。これまで保育実習室で開催してきたおもちゃ講座や鑑賞会を、家庭で楽しめるように配信したいと考えた。

これら、オンラインによる配信をするに際し、2020年京都市右京区まちづくり支援事業の支援を受けることが叶った。これにより、オンライン特別企画の依頼、録画取材の交通費に充てることができた。

2. オンラインミニ子育て支援講座、オンライン特別企画の配信

オンラインミニ子育て支援講座、オンライン特別企画として行ったのは表1のとおりである。

オンラインミニ子育て支援講座は5回配信した、内2回は「親子で楽しむわらべうた遊び」、2回は「つくっ

てあそぼう」および「つくって遊ぼう」のテーマで簡単な工作を、1回は「楽しいハンカチ遊び」として公開した。内容ごとに報告する。

(1) オンラインミニ子育て支援講座

a. 親子で楽しむわらべうた遊び

わらべうたは、子どもたちが遊びや行事、日常的な行動の中で無意識のうちに自然に歌い、伝承してきた歌である（小島1983）。子どもと遊びながら歌う遊び歌の中でも、音階、リズム、旋律、楽式において、日本の伝統音楽のコアを示している（小島1969）。小島らがわらべうたの研究蒐集をした時代においては、家庭内で、また子ども同士がわらべうたを歌いながら遊び、遊びにバリエーションを持たせるということが頻繁になされた。しかし、高度産業、高度情報化の社会のもと、共同体的なつながり、遊びを中心とした子ども文化が薄れ、わらべうた遊びが伝承されることが少なくなってきたと言われて久しい（泉1996）。このような経過の中で、保育実践においてわらべうたを用いることは、わらべうたを消失させないための残された手だてでもあろう。実際、わらべうたによる保育実践の大きな流れが保育界にもたらされたこともあった。しかし、各地域の方言を入れ込み遊びながら口承伝承されるわらべうたが、テキストや動画上に一旦載せられ、それをお手本としてわらべうたを普及させることについては、慎重な検討がなされるべきであろう。

このような課題を含みながらも、オンラインミニ子育て支援講座でわらべうた遊びを取り上げた理由は二つある。一つには、声と身体をつかう遊びであり、準備物不要でどこでも行えることである。二つ目は、短い時間で楽しめることである。楽しい思いをした子ど

表1) オンラインミニ子育て支援講座、オンライン特別企画の配信と内容

公開開始～終了	配信内容	配信種別
2020/9/30～	「親子で楽しむわらべうた遊び」	オンラインミニ子育て支援講座
2020/10/21～	「つくってあそぼう」	オンラインミニ子育て支援講座
2020/11/11～	「楽しいハンカチ遊び」	オンラインミニ子育て支援講座
2020/11/18～	「おもちゃ講座」	オンライン特別企画
2020/12/2～	「つくって遊ぼう」	オンラインミニ子育て支援講座
2020/12/16～	「見て聴いて楽しむオルゴール」	オンライン特別企画
2021/1/20～	「親子で楽しむわらべうた遊び」	オンラインミニ子育て支援講座
2021/2/10～5/10	「おたのしみ劇場」	オンライン特別企画
2021/3/20～6/20	「紙芝居屋さん」	オンライン特別企画

もがもう一回しよう、もっとしてほしい、という思いを持って伝えられるようになることがねらいである。

このような「親子で楽しむわらべうた遊び」を2本、企画・撮影・編集・配信した(資料1、2)。撮影には、各回、3名の学生が登場した。「真似を引き出すわらべうたあそび」では正面から手の動きが見えやすい位置で、「してもらわらべうた遊び」「揺らしてもらわらべうた遊び」では学生がぬいぐるみを膝に乗せ、大人が子どもにしてあげるようにぬいぐるみを動かして遊ぶ様子を撮影した。また、本学科のマスコットであり、光華こどもひろばの際、傍らにいて、大型のクマのぬいぐるみ「ベル」も画面内に写るようにした

ブログ上では動画とともに、わらべうたの歌詞、そしてそれぞれの遊びがもつ成長発達上の意味について、簡単な言葉で字幕説明を記した。以下枠内は実際に本学科ブログで配信した内容である。なお、これらのわらべうたは著作権が適用されていない。

b. つくって遊ぼう

親子で制作し、それを用いて遊んでみようという内

容の配信を行った。内容を制作するにあたって、素材、作るもの、発信方法の工夫、を決める必要がある。内容となる題材を決めるにあたり、コロナ禍における社会状況を鑑み、親子での在宅時間が多い中、親子で過ごす時間の充実に貢献すべく、以下の5点を軸に内容を考案した。

- i) 材料を購入する必要がなく、家庭にある材料で作れること
- ii) 作り方がわかりやすく、幼児はもちろん、ものづくりに馴染みがない保護者も「できそうだ」「やってみよう」と思えそうなもの
- iii) 子どもの対象年齢は、これまでの来場者の傾向から、できたもので遊ぶ場合は0歳児から、子ども自身が作る場合は年少児ごろからできるものとする
- iv) 作る、遊ぶプロセスの中で親子のコミュニケーションが生まれるもの
- v) 子どもの育ちに寄与すると考えられるもの

以上の観点に基づき、「つくってあそぼう! ゆらゆらペットボトルおもちゃ(資料3)」「つくって遊ぼう

資料1) 「親子で楽しむわらべうた遊び」2020年9月30日配信

光華こどもひろば オンライン子育て支援講座「親子で楽しむわらべうた遊び」
わらべうたはどこにいても、そのまま歌いながら遊べます。「いち、に、いち、に」の拍感にのって体を動かしながら歌ってみましょう。「真似を引き出すわらべうた遊び」一つと、「してもらわらべうた遊び」二つを紹介します。

「真似を引き出すわらべうた遊び」

大人の口元をよく見て、同じように言ってみたり、動きを真似てくれたら嬉しいですね。「まねることはまなぶこと」ですね。

さらのしたに さらが いちまい ちょっとあらって ふいて ふせて
さらのしたに さらが にまい ちょっとあらって ふいて ふせて
さらのしたに さらが さんまい ちょっとあらって ふいて ふせて
さらのしたに さらが よんまい ちょっとあらって ふいて ふせて
さらのしたに さらが ごまい ちょっとあらって ふいて ふせて

とだなをあけて
いれましょ

「してもらわらべうた遊び①」

体を軽く上下に動かしてもらいと、子どもは楽しい気持ちになります。最後の、こけてしまうタイミングを子どもは期待するようになります。

おすわりやすいすどっせ あんまりのったらこけまっせ

「してもらわらべうた遊び②」

触ってもらったり、軽くねじってもらったり、体ぐるみで遊んでみましょう。

はりにいと とおして
ぞうきんぬいましょ ちくちくちくちく..
あーらって しぼって あーらって しぼって
ぞうきんがけだ しゅわしゅわしゅわしゅわ..
皆さんも楽しんで下さいね。

資料2) 「親子で楽しむわらべうた遊び」2021年1月20日配信

光華こどもひろば オンライン子育て支援講座「親子で楽しむわらべうた遊び」
 〈揺らしてもらい遊び〉
 ・親子で向かい合って、または膝の上に乗せてもらって、わらべうたを歌いながらあそびましょう。初めは前後に揺れて遊びます。
 ぎっちらこ めっちらこ おふねは めっちらこ
 めっちらこ めっちらこ おふねは めっちらこ
 ・上下に揺らしてもらい遊びもあります。
 ろめんでんしゃに ○○ちゃんをのせて
 いまにおちるよ いまにおちるよ
 すととーん とん
 「とん」と下に落としてもらう瞬間を、子どもは期待するようになります。

〈占い遊び〉
 ・次は占い遊びの紹介です。
 子どもの手のひらを軽く叩いて、「ここ」と答えてくれた場所から両方の親指で交互に触ってあげます。ゆっくり、「おーなーべーふー」と唱えてくださいね。子どもは一指一指触れてもらう自分の腕をじっと見るようになります。肘のところで止まった文字で占います。
 (いたいとこゆうてや ここ)
 おーなーべーふ
 お：おしゃれ
 な：なまけもの
 べ：べんきょうか
 ふ：ふまじめ
 2歳くらいの子どもでも、「おしゃれ」と占ってもらいと喜ぶますよ。
 やってみてね！

(<https://www.koka.ac.jp/child/news/2429/>)

～びっくりたまご～(資料4)」の2本を企画・撮影・編集・配信した。

「つくってあそぼう！ゆらゆらペットボトルおもちゃ」の制作は、ペットボトル容器に水とペットボトルのフィルムをはがして切ったものを入れ、蓋をテープで固定するものである。素材となるペットボトルは赤ちゃんが持つことを想定して、現在市販されているもので最小のもの(112ml)を使用した。一般的な360mlや500mlのものでも制作可能である。また、中に入れるフィルムはペットボトルのフィルムを使用している。フィルムについては様々な飲み物から好みの色彩のものを選んだり、お菓子の袋などを使用するなど、工夫次第で色や光り方のバリエーションを増やすことができる(図2)。中身を誤飲することを避けるために蓋をテープで固定し安全性に配慮した。

この制作における子どもの育ちへの視点としては、「見る」ことを促すことと「手で重さを感じながら動かす」こと、「言葉掛け」が挙げられる。空のペットボトルではなく、水を入れることによって、中の素材がゆっくりと動くため、素材の動きを目で追い、水を介した透過光による色彩の美しさや動きの面白さを感じ

ることができる(図3)。また、手で持った場合にはその重みを感じながら手首を動かす経験となる。さらに、できたものを子どもに見せながら、色や動きについて言葉掛けをしたり、入れる材料を工夫して一緒に作れるといった親子のコミュニケーションへの提案を行った(図4)。

「つくって遊ぼう～びっくりたまご～」の制作は紙を蛇腹折りにし、重なった部分に卵を、広げた真ん中の部分に卵から生まれたものを描くものである。用紙はA4サイズのコピー用紙、描画材は水性ペンと色鉛筆を使用した。家庭にある描画可能な紙であればどのようなものでも可能である。また、「絵を描く」ということに苦手意識を持つ場合もあると考え、本文中で「絵を描くことが難しければ、チラシの写真を切り取って貼っても作れます」と示した。折る幅については、本来はどのような幅でも可能であるが、学生とともに伝えやすい折り方を検討、試作を行った結果、まず長方形の長辺に対して二分の一に折り、上に重なった紙だけさらに半分折ると定めた。

子どもの育ちへの視点としては、「何が出てくるか(自分で描く場合は何を生み出すか)想像・イメージ

資料3) 「つくってあそぼう！ゆらゆらペットボトルおもちゃ」 2020年10月21日配信

光華こどもひろば オンライン子育て支援講座 「つくってあそぼう！その①」
 こんにちは！光華こどもひろば オンライン子育て支援講座 第2回目は
 「つくってあそぼう！ゆらゆらペットボトルおもちゃ」です。
 ペットボトルにお水とフィルムを入れたこのおもちゃは
 水の中でフィルムがゆっくりと揺れように動く様子を目で追いかけて楽しめます。
 フィルムの色や光の美しさを味わいながら、視覚を刺激し
 手で握って持ち上げたり、揺らしたりすることで握る力や手首の柔軟さを促します。
 <作り方>

- ①小さなペットボトルを用意します。
- ②その中に、ペットボトルのフィルムを小さく切って入れます。
 フィルム状のものでしたら、色つきの袋などでも大丈夫です。
 紙は溶けてしまうので避けてください。
- ③フタをしっかりとしめて、テープで固定します。
 開かないようにしたいので、フタと本体にまたがるようにテープを貼ってください。
- ④手にもってゆらゆら揺らして、出来上がり☆
 光に透かしたり、ビーズと組み合わせて入れるなど、工夫は無限大です。
 おうちにあるものでできるのも魅力ですね。
 ぜひ作ってみてくださいね♪

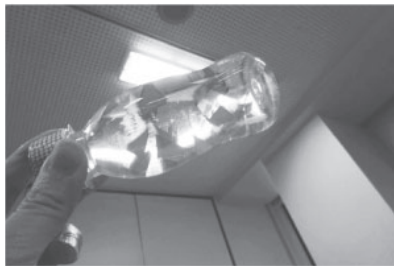


図2) ペットボトル内のフィルム
が揺れ動く様子



図3) 3種の作例



図4) 出演した学生

(<https://www.koka.ac.jp/child/news/2256/>)

する」「隠れていたものが現れる面白さを楽しむ」ことが挙げられる。また、親子で楽しんでもらうために遊ぶ際の言葉掛け例を挙げながら解説した(図5,6)。

動画制作時の留意点について記す。「ものづくり」を動画で配信する場合、作り方が明確であること、制作物の魅力が伝わるのが重要であると考え。そのため、材料提示の方法、作り方説明の順序と区切り、完成物を見せ方について検討し、動画の構成を決定した。本動画の構成(各約3分)は以下の通りである。

図7,8で示したように、まず「今日は〇〇をつくります」と完成形を示し、準備物をすべて映してから、実際の作り方の工程に入る、という構成とすることで、作るものへのイメージと興味を持ち、その後の作り方の理解がしやすいように工夫した。

作り方紹介については、内容が明確になるよう、作業の順番と示し方(工程と使うものを言葉で表現する、一つ一つの動作を説明する、使わないものは避けて必

要なものが見えやすいようにする、など)を学生とシミュレーションして決定、撮影を行った。最後にはできたもので遊ぶことへの期待感を持ってもらえるよう、遊び方や工夫の展開について示す時間を設けた。

c. 楽しいハンカチ遊び

幼い子どもは柔らかい手触りのものを手にすることを好む。この回では、ハンカチという身近な素材を使う遊びを紹介した。ハンカチをたたんで形が変わっていき、その形を何かに見立てるのである。これまでに見たことがあるもの、知っているものを想起することは、想像力を働かせることであり、見立てたもので「ごっこ遊び」がはじまる。

3人の学生のうち、1人が説明しながらハンカチをたたんでいく。四隅を中央に集めてたたむことを「まんやかに」と言って表現すると、他の2人も「まんやかに」と復唱する。そのように、応答のリズムを作り

資料4) 「つくって遊ぼう～びっくりたまご～」2020年12月2日配信

光華こどもひろば オンライン ミニ子育て支援講座 「つくって遊ぼう～びっくりたまご～」
 こんにちは。オンライン ミニ子育て支援講座 第4回目は紙とペンがあればできる「つくってあそぼう～びっくりたまご」の工作です。

記事の最後に動画がありますので、ご覧ください。

<つくり方>

- ①紙とペンを用意します
- ②紙を半分に折ります
- ③上の紙だけをもう一度半分に折り返します。
- ④折り目をまたぐようにして、たまごを描きます
- ⑤紙を広げて、たまごの線のつづきから、割れているようにギザギザを描きます
- ⑥真ん中に生まれてくるものを描きます。動画ではひよこを描いていますが、好きなものでOK！ 絵を描くことが難しいければ、チラシの写真を切り取って貼っても作れます。
- ⑦再び折りたたんでできあがり☆ 折りたたんで見せて、「何がうまれるかな～」と言いながら広げてあげてください。

この遊びは、隠れていたものが出てくる、という点で、いないいないばあ遊びに似た側面があります。いないいないばあ遊びは、子どもの記憶力を伸ばすといわれていますし、何よりも大人が「何かな～」 「○○でした～」と見せながら語りかけ、それに対して子どもがわくわくしたり笑顔になったりと、コミュニケーションを交わしながら遊べるところが魅力です。

ぜひ何度も繰り返して遊んでください。きっと楽しんでくれますよ！

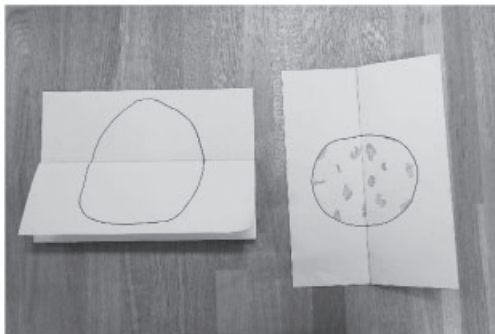


図5) 作例 折りたたんだ紙に卵が描かれている



図6) 作例 図5の紙を開くと中から生き物が現れる

(<https://www.koka.ac.jp/child/news/2310/>)

メンバーと制作物の紹介 (20秒)	材料の提示 (20秒)	作り方紹介 (2分)	完成品を動かして見せる (15秒)	挨拶 (5秒)
----------------------	----------------	---------------	----------------------	------------

図7) 「つくってあそぼう！ゆらゆらペットボトルおもちゃ」の構成

メンバーと制作物の紹介 (15秒)	材料の提示 (10秒)	作り方紹介 (2分10秒)	工夫のバリエーションを示す (20秒)	挨拶 (5秒)
----------------------	----------------	------------------	------------------------	------------

図8) 「つくって遊ぼう～びっくりたまご～」の構成

出しながら、「バナナ」と「リボン」を作り、おいしい、と食べる真似をしたり、頭に飾って嬉しそうな表情を見せた(資料5)。

この回も大型のクマのぬいぐるみ「ベル」が画面内に写るようにした。

オンラインミニ子育て支援講座についてのまとめ

これらの撮影では各回、学生3名に出演を依頼した。

活動を通して、学生は、題材についての検討、遊び方、作例の制作、最終的な材料の決定、説明方法ならびに台詞を考えた。撮影に際しては、画面内における出演者の位置、材料配置を考え、どのようなカットを撮れば伝わりやすいかと意見を出しあった。そして3名が応答的に声をかけあって1つのまとまりのあるシーンを作りあげた。このように、見る側にとって、わかりやすく興味を持てるようにということを考慮しながら

資料5) 「楽しいハンカチ遊び」2020年11月11日配信

光華こどもひろば オンライン子育て支援講座「楽しいハンカチ遊び」

ハンカチで作ってみましょう。まずは「バナナ」です。

ハンカチを広げて置きます。

- ①四隅を真ん中に集めます。
 - ②中心をつまんで持ちあげましょう。
 - ③そして下側を集めて握ると
 - ④「バナナ」のできあがり！
- 皮をむいてパクッと食べよう！

次は「リボン」です。

ハンカチを広げて置きます。

- ①下の辺を真ん中の線に合わせて折ります。
- ②上の辺を真ん中の線に合わせて折ります。
- ③そのままの形で裏返し、縦にして置きます。
- ④そして下の辺を真ん中の線に合わせて折ります。
- ⑤上の辺を真ん中の線に合わせて折ります。正方形になっていますよ。
- ⑥中心の左側2枚を左手指で、右側2枚を右手指でつまみ
- ⑦左右に引っ張りながら裏返すと
- ⑧「リボン」のできあがり！

頭にのせておしゃれしよう！

本物のバナナではないのにおいしく食べる、リボンのように見えておしゃれな気分になる…こんな風に見立てて遊んで、想像力が育っていきます。

(<https://www.koka.ac.jp/child/news/2281/>)

検討をした。これらのことは、保育現場における活動の実施においても必要となる要素である。学生たちはリハーサルを行う中で、「わらべうた遊び」「作って遊ぶこと」「ハンカチ遊び」、それぞれの面白さを伝えるための準備や見せ方、を表現する言葉かけや身振りについて考え、実践する経験となったと考えられる。

教員にとっても、親子に向けて動画を制作・配信したのは、初めての経験であった。家庭で過ごす親子を支援する方法を改めて考える機会となった。この動画を見た親子に、すぐに同じように遊んでほしいと望んだのであった。そのため、内容や伝え方において、より要素をシンプルにし、わかりやすく伝える必要があった。そのプロセスを経ることで、一つの活動の核となる魅力は何か、伝わる表現とはどのようなものか、について改めて考察する機会となった。

配信においては、ブログ本文においても遊び方、作り方手順とともに解説と作品写真を示し、動画・ブログ本文（静止画）どちらでも視聴者のニーズに合わせて選べるように工夫した。また、動画の編集にあたっては、音声聞き取れない場合や、音を消して視聴しても遊び方、作り方が伝わるよう、字幕を設定した。字幕は遊び方のシーンごと、作り方の一工程ごとに区切り、文字ができるだけ大きくなるように配慮した。適宜記号を配するなどして、気楽に楽しんでもらえる

ような雰囲気づくりを行った。

これらの配信を前に、各オンラインミニ子育て支援講座の日程、内容案内、QRコードを示した大型ポスターを作成し、五条葛野大路交差点の南向き、東向きの2か所に貼付した。ここは、2019年度以前も光華こどもひろばの案内ポスターを貼付していた位置である。また同内容の案内パンフレットを、右京区役所、右京区警察署に配布を依頼した。これらもこれまでと同様の広報の仕方である。加えて、学科ブログにおいて、予告記事を配信した。

これらの配信では、動画を視聴した側がどのように受け取り、実際に親子で遊んだのか、実際に作ったのかどうか、現時点では把握できていない。親子で遊んで親も子も楽しいひと時が過ごせたのか、そのエピソードを聞くことができたなら、子育て支援に貢献するものとなったのか振り返り、さらによりよい内容を検討することができるであろう。

(2) オンライン特別企画

上記のオンラインミニ子育て支援講座が、親子で短い時間で楽しめることをねらいとしたことに対し、オンライン特別企画は20～30分間、じっくりと文化的な世界を味わえる内容である。いずれも、これまでに光華こどもひろば特別企画として実施したことがある

内容である。

a. おもちゃ講座

子どもの本とおもちゃの店「百町森」の柿田友広氏による「子どもの育ちを支えるおもちゃ」のテーマでのレクチャーを配信した。赤ちゃんからの心身の育ちをたどり、具体的なおもちゃを手にして、子どもへの語りかけを紹介することから始まっている。モビール、おしゃぶり、がらがら、シフォンの布、ボール、こま、といったおもちゃが、乳児の頃から「しっかりと物を見る」「自分の手でさわる」「手首を動かす」「指先を動かす」ことを育てていく。はじめて出会うおもちゃなので心地よい音や色のものを選んであげましょう、というお勧めをしている。いろいろな手触りをたのしみおもちゃや楽器の紹介もあった。「つまむ」という人間独特の動作に着目して、つまみのついた型はめや、パズルで遊ぶとき、子どもは指先に注意を集中させて取り組み、ものを操作していくということを経験していく。このような子どもの姿を引き出すような環境としておもちゃの設定を考えたいものである。こうして形に興味を示しはじめた子どもは、手首をねじり、指先で微調整しながら積み木遊びを重ねていく。

このように、一つ一つのおもちゃは子どもの育ちへの願いが込められたものであることを示し、子どもが育つ環境づくりへの示唆を与えるものであった。

〔配信：2020年11月18日（水）10：00～2021年11月3日現在公開中〕

b. 見て聴いて楽しむオルゴール

2019年1月に保育実習室で行ったオルゴールコンサートが、見ていても楽しく、響きが豊かで、まさに癒しの時間になったようで好評であったことから、オンライン特別企画で再び取り上げたいと考えた。

まず、2020年11月20日に上京区のオルゴールサロン・ヒロへ、学生5名と教員1名が取材に向かった。室内には大小、世界中から集めたオルゴールがあり、特徴的なものを聴かせていただいたのち、学生が5点を選び、それぞれの正しい演奏法を教えてもらった。学生による簡単な紹介を挟みながらコンサート仕立てにしてオルゴール演奏を行い、録画した。

編集し、配信した内容は、ストリートオルガンによる「トルコ行進曲」、250年前のスイスの時計職人作

のシンギングバード、小さな鳥の声、ミラードール型オルゴールの「ウォルチング・マチルダ」、ディスク型オルゴールによる「ジングルベル」、である。

〔配信：2020年12月16日（水）10：00～2021年11月3日現在公開中〕

c. おたのしみ劇場

劇団むむのこによる「おたのしみ劇場」は子どもたちに劇表現(人形劇やペープサート、エプロンシアターなど)に直接触れ、面白さや迫力を感じてもらいたいとの願いから、継続的に続けてきた企画である。2020年度においても劇表現に触れる機会を設けたいとの思いから、オンラインでの出演を依頼した。映像は、3か月の期間限定で公開した。図9のポスターで広報した。

<内容>

- ・ぬいぐるみ人形によるお相撲あそびと次の内容紹介
- ・絵本専門店 絵本館 花田睦子さんによる絵本紹介 昔話 『ももたろう』(文/松井直 画/赤羽末吉 福音館書店 初版1965年)
- 『こぶとり』(文/大川悦生 画/太田耕士 ポプラ社 1968年)
- 『かえるをのんだととさん』(再話/日野十成 絵/斎藤隆夫 福音館書店 初版2008年)の紹介
- 『子どもに語るシリーズ 日本の昔話』(再話/稲田和子、筒井悦子 カット/多田ヒロシ こぐま社 1995年)とそのシリーズの紹介

- ・ぬいぐるみ人形による振り返り、次のお話紹介
- ・人形劇『かさじぞう』(制作：むむのこ企画)

〔配信 2020年2月10日（水）10：00～2020年5月10日（月）17：00、再生回数73〕

コロナ以前の対面での実施内容は、会場の子どもたちに呼びかけたり、声をかけながら進めるなど、双方向性を持つ内容であった。オンライン配信では、一方方向の発信となるため工夫が必要であったことが推察される。例えば、花田氏による絵本紹介では、絵本を広げながら読む読み聞かせをし、絵本の絵の魅力や言葉のリズムの良さなどの見どころを紹介するとともに「耳から聞く物語」として文章が主体の「子どもに語るシリーズ」を紹介していた。これは家庭で過ごす親子に対して、絵の魅力では視覚的な楽しみ方、子ども



図9) オンライン特別企画「おたのしみ劇場」のポスター

に語るシリーズでは耳を澄まして聞いた言葉からイメージするというお話の楽しみ方を提案するものとなっている。

人形劇『かさじぞう』はペープサートを主体とした人形劇であったが、物語の進行に合わせて、ズームアップ（被写体を拡大する）や左から右にパン（カメラを水平方向に動かして撮影する）するなどの映像技法が使用されていた。視点の移動や注視は、直接対面型の人形劇であれば鑑賞者が自ら行うものであるが、映像は実物よりも小さなモニターで再現されることが多いため全体を俯瞰することになり、主体的に視点を選択することが難しい。これらを解消し、物語の内容をより伝えやすくするための工夫だと思われる。そして、そのような技法を使用しながらも、アニメーションではなく、あくまでもペープサート式の人形を使用して「人形劇」とすることで、鑑賞者が、実際には動かない人形から表情や心情を創造的にイメージする、劇ならではの鑑賞体験を呼び起こすものとなっていた。

また、始まり、中間、終わりに2体のぬいぐるみが登場して、2体が会話をし、視聴者に呼びかけを行うことで双方向性の演出が行われ、親しみを感じるものとなっていた（図10）。

d. 紙芝居

これまで本学科では、光華子どもひろばの特別企画として、年に1回「こどもまつり」を開催してきた。その始まりは、2018年度、4年生の一人の学生が夏祭りをテーマとした卒業研究に取り組んだことによる。学生自身が実際に企画し、その他多くの学生が参加・協力することによって開催運営ができたのであった。その際の夏祭りや縁日をイメージした「ヨーヨー釣り」



図10) お楽しみ劇場 ぬいぐるみ人形による呼びかけの場面

や「くじびき」、「ボール投げ」などの遊びコーナーの設置、および、一般社団法人 塩崎おとぎ紙芝居博物館の古橋理絵氏を招聘し、紙芝居の上演を行うというアイデアを引継ぎ、「こどもまつり」を毎年恒例の特別企画としてきたのであった。

古橋氏の紙芝居は、子どもたちだけでなく、保護者や学生スタッフからも人気が高く、こどもまつりの一つの目玉として位置づけられてきた。ここで紙芝居について説明しておく。紙芝居というものは日本で生まれた児童文化財であり、昭和5年に登場した街頭紙芝居が原型である。紙芝居師が公園などで拍子木を打ち鳴らして子どもたちを集め、自転車の荷台に載せた舞台上で演じたのであった（横山2009）。このように街頭紙芝居は子どもたちの娯楽として重要な位置を占めていた。これらの紙芝居は手描きの創作であり、内容は「正義の味方」シリーズからナンセンスものまで、と幅広い。今日も紙芝居師によって公演がつづけられており、時代を超えた普遍的な面白さを有し、見る者に元気をもたらす。そのため、今回のコロナ禍においても、子どもと保護者が共に楽しめることを願って、紙芝居をオンライン特別企画の一つとして取り上げた。

紙芝居動画は、2021年2月19日、教員ならびに学生2名が、塩崎おとぎ紙芝居博物館を訪問して撮影した。演目は「チョンちゃん 4034 巻目」、「ペチヨコちゃん」の2本である。なお紙芝居上演時には、飛沫防止シートを使用するなど、感染防止対策を行った。撮影した動画は、こどもまつり当日に上演するとともに、大学のwebサイトで3ヶ月間、限定公開した。

〔配信 2021年3月20日（土）10:00～6月20日17:00（日）、再生回数60〕

(3) ベルの話

本学科のマスコットであり、光華こどもひろばの人気者であるクマのぬいぐるみ、ベルを主人公にした物語および動画について報告する。

2020年の前期、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、大学の授業はすべてオンライン授業となり、光華こどもひろばも開催中止となってしまった。そのようななか、学生や子どもたちの再会を願って、「ぬいぐるみのベルが誰もいない学内を冒険探検する」という物語を作成し、2020年6月から7月にかけて学科ブログ上で配信した。そして今回、オンライン特別企画として、子どもたちにより直接的に語りかけ、楽しんでもらえるよう、ベルを主人公にした動画を作成することにした。動画作成にあたり、Adobe Character Animatorを用いて、ベルのキャラクターを作成し、ベルが話し手に合わせて動くよう準備した。そして、ぬいぐるみのベルが「こどもひろば再開を知らせる」動画、「こどもまつりへの来場を呼びかける」動画の2種類を作成した。

試作段階では、ベルのイラストをもとに作成したキャラクター、ベルの写真をもとに作成したキャラクターの2つを準備したが、筆者らで検討した結果、小さな子どもが見ても、ぬいぐるみのベルだと判別できるようにするためには、実際の写真をもとにしたキャラクターのほうがよいという結論に達した。しかし、写真を使用する場合は、その「著作権・肖像権」について確認する必要がある。なぜなら、ベルのキャラクターのプログラムや「目・鼻・口」などの表情は、新たに作成しているが、キャラクターの身体部分はぬいぐるみの写真をもとに作成しているからである。そこ

で本学科における、ぬいぐるみのキャラクター使用の可否について、ぬいぐるみを製作した株式会社サン・アローに問い合わせることにした。社内で検討いただいた結果、ありがたいことに、本学科での新たな試みを応援してくださり、キャラクター使用について許可をいただいた。

その上で、本学科学生がベルの声を担当し、1年ぶりに開催される「光華こどもひろば」、「こどもまつり」の広報用の動画を作成した(図11,12)。前者は、2021年3月中旬より本学科ブログで公開、後者は「こどもまつり」で紹介した。

(4) 動画による子育て交流会

例年であれば、親子2組を授業に招くのであるが、2020年度は1年生科目「乳児保育Ⅱa」(33名履修)、「乳児保育Ⅱb」(30名履修)において、事前学習の後、動画による子育て交流会を開催した³⁾。それぞれの実施日時は11/18(水)2講時、12/9(水)2講時であった。動画による子育て交流会の内容を記す。

2019年度の光華こどもひろば参加者であったWさんとTさん親子(いずれも子どもは2歳)に、11/11(水)午前に、本学保育実習室に来校していただき、2年生学生2人が学生インタビュアーとして、30分間のインタビュー動画撮影を行った。Wさん、Tさんは2019年11月の子育て交流会において子育てについてお話していただいております、学生インタビュアー2人は、その際履修生として参加していた。1年ぶりに出会った親子に、出産について・出産前と出産後の変化・子育ての日々・好きなあそび、好きな食べ物、話すこと・子育ての楽しさとしんどさ・光華こどもひろば参加の



図 11) ベルによる光華こどもひろば再開のお知らせ



図 12) ベルによるこどもまつり開催のお知らせ

きっかけ・コロナ禍について思うこと・お母様が今一番したいこと、の項目でインタビューを行った。特に、緊急事態宣言下で外出制限があり、子どもが気分転換できるような場に連れていくこともできなかった日々の辛さと、家の中で工夫して家族で遊ぼう、と気持ちを徐々に変化させていった様子の話は、この機会だからこそ聞いた内容であった。

その動画を上記授業時に視聴したのであるが、マスクをした姿でのインタビューであるため、インタビュー内容を記した資料を配布することにした。視聴した1年生の学生は、視聴の後、お礼カードとしてWさん親子宛、Tさん親子宛のメッセージを記入した。そして、次の対面授業時に切り貼りをしてカード状に仕上げ、それぞれに郵送した。このメッセージ内容によると、学生は、2歳の子どもの家での様子・出産について・コロナ禍での子育ての実際、について初めて知ることができ、これらを保育者を目指す自らに照らして聞いて学びにしていることがわかる。そして、子どもを育てる保護者を支援する視点を持って、子どもの保育をしていく必要があることを理解していることがわかった。

3. こどもまつりの対面開催

2020年度は上記のようにオンラインによる配信の方法で光華こどもひろばの活動を行ってきた。並行して、2度目の緊急事態宣言が解除される年度末に、対面開催ができないか、検討を続けた。検討内容と実際を下記に記す。

(1) 対面再開催に向けた検討

1年間閉会してきた集会の再開検討であり、しかも感染予防を徹底できる状況に設定する必要があった。検討のポイントは、a. 参加人数、b. 保育環境設定、c. 感染予防、で、これらは複合的に考える必要があるだろう。検討の際、2018年にインタビューを行った保育者養成校とも情報交換も行った。

a. 参加人数

ひろば型と教室型の融合型であることを特徴としてきた光華こどもひろばは、参加人数に定員を設けることにこれまで踏み切れずにきた。しかし、人数が増えるほど感染リスクが高まることから、この度には一定

の定員を定めることにした。

b. 保育環境設定

遊びのコーナーを5～6箇所設け、子どもが分散するように設定する。机の上にはアクリルボードを立てておき、状況に応じて移動させて使う。水分補給の場は特設する。

また、受付が混雑しないように、受付業務を簡素化する。そのために、各記入書式の見直しを行った。

C. 感染予防

保育スタッフ（教員、学生、アルバイト）、参加親子の健康チェックと当日検温、マスクの着用（子どもには義務付けない）を求める。窓、扉を開放することによる換気、空気洗浄機の設置、アルコールスプレー、アルコール布の設置を行い、扉、机、各遊びコーナーの備品を頻回に消毒ができるようにする。

また、環境設定図を作成し、参加者の動線の可能性、および換気に関して空気の流れを確認できるようにした。

これらのポイントで、学科内検討した結果、2021年3月20日オープンキャンパス日に、光華こどもひろばを特別企画こどもまつり、という設定で企画、対面で開催することになった。定員については、「大人/子どもの合計を20人」とし、web申込フォームで事前申し込みをしてもらうこととした。2021年3月8日に申し込み受付を開始した。

(2) こどもまつりの準備

こどもまつりでは、玉入れ、コマづくり、ヨーヨーつり、動物マスクづくり、あてものくじ、のコーナーを設定し、親子は興味を持ったコーナーの遊びから順に参加する。このように、おもちゃや用具の共有を極力避ける形での設定とした。

学生のスタッフ12名と、事前に2日間の準備日を設けた。これらの遊びコーナーの分担を決め、それぞれの準備物を整えた。また、お楽しみのおし物として、しかけ絵クイズを作成した。これは、オンラインミニ子育て支援講座「つくって遊ぼう～びっくりたまご～」で紹介したものと同様に作り、クイズ仕立てにして子どもたちに問いかけようとするものである。さらに、12名の学生スタッフが2グループに分かれて、トー

ンチャイム、ハンドベルの合奏を練習し発表できるようにした。図 13 のように会場設定をした。

(3) 広報・募集

対面開催のための告知としては、ポスターの貼付と本学科ブログにおける配信を行った(図 14)。感染症対策のために来場者の人数に上限を設けたため、人数や連絡先を把握する必要性が生じ、事前申し込み制となった。中止の場合や、感染者発生時に確実に連絡を取るため、住所、電話番号、メールアドレスを記載してもらうこととした。スムーズな募集のため、web申し込みフォームを作成し、募集を行った。なるべくわかりやすく簡単な方法で募集受付フォーム URL にたどり着いてもらうための工夫として、QR コードを作成、掲載した。

フォームを利用して収集した情報は以下の通りである。

- ・お子さまの人数・参加されるお子さまの氏名・参加されるお子さまの氏名ふりがな・参加されるお子さま、生年月日・参加される大人の人数・参加される大人氏名・お電話番号・住所・メールアドレス

(4) こどもまつりの実際

こどもまつりは、3月20日(土・祝) 10:30～

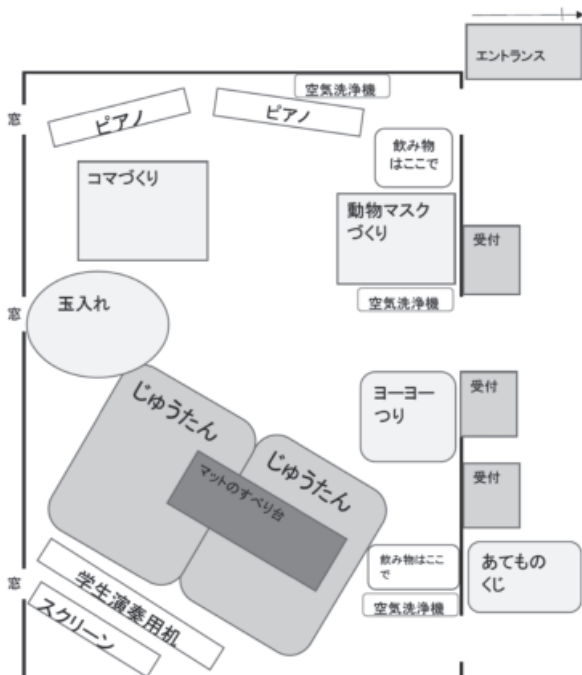


図 13) こどもまつりの設定

12:00、本学保育実習室において実施した。当日の来場者は6家族18名、その内訳は子ども10名、保護者8名であった。スタッフとして、学生12名、教員2名、保育士資格を持つアルバイト1名が参加した。

感染予防対策として、来場の際、参加者の検温を行い、入室前に手のアルコール消毒を実施した。当日のスケジュールは資料6の通りである。

(5) こどもまつりのアンケート結果

こどもまつりの閉会時に、今後の参考のために差し支えない範囲で記入いただきたい、とアンケートを依頼した。アンケートは無記名での記入である。また、こどもまつり参加に際し、大学が行う地域子育て支援活動として教育・研究活動に協力頂きたい旨と個人情報保護の観点から十分に配慮することの説明を行い同意書を頂いている。本アンケートでは来場された保護者8名のうち7名から回答を得た。その内容を以下にまとめる。

a. こどもまつりを知った経緯

まず今回のこどもまつりをどのようにして知ったのか、来場の経緯について尋ねた。その結果、口コミという回答者が4名、大学前に掲示したポスターと答えた回答者が3名であった。インターネット上で知った

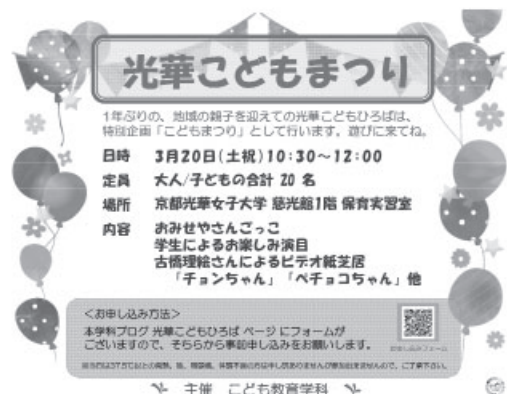


図 14) 対面開催のための告知

資料6) こどもまつり当日のスケジュール

来場時、受付で手続き（体温・体調記入、初回趣旨同意書記入、出席、子どもの名札作り、遊び券の配布）。その後、順次入室。

10:30	こどもまつり開始 「おみせやさんごっこ」 玉入れ・コマづくり・ヨーヨーつり・動物マスクづくり・あてものくじ
11:05	学生スタッフによる出し物 ・みんなで体操（サンサン体操） ・ベルの動画 ・学生スタッフによるトーンチャイムの演奏「小さな世界」 ハンドベルの演奏「ミッキーマウスマーチ」 しかけ絵クイズ ・古橋氏の紙芝居動画上映
11:50	保護者アンケート
12:00	こどもまつり終了

という人は0名であった。このことから、これまでの光華こどもひろばに何らかの形で参加して下さった方の紹介、そして大学前のポスターが、光華こどもひろばの活動を伝える重要な発信源になっていることがうかがえた。

b. こどもまつりで子どもが楽しんでいた活動について

こどもまつりで、子どもが楽しんでいた活動はどのようなものだったのか、保護者に尋ねたところ、次のような回答が寄せられた。

- ・「制作活動」「動物マスクづくり、コマづくり（シールはり）」
- ・「ダンス」・「あてものくじ」・「紙芝居」
- ・「スタッフから、いろいろ声をかけてもらって喜んでいた」（同様の回答 2名）

ここに報告されたのは保護者から見た子どもの姿ではあるが、今回の活動において、子どもが自分自身で作り、参加することを楽しむとともに、スタッフとの関わりを楽しんでいたことがうかがえる。

c. こどもまつりで保護者が興味を持った活動について

こどもまつりで、保護者自身が興味を持った活動はどのようなものだったのか尋ねたところ、次のような回答が寄せられた。

- ・「動物マスクづくり」「玉入れ」
- ・「紙芝居。紙芝居には昔ながらの良さがあり、テレビや動画とは違う良さに親しんでほしい」
- ・「楽器。皆さんが練習してステキな音楽をきかせてもらってうれしかった」

- ・「ハンドベルがきれいな音で癒やされた」

今回の内容は、子ども向けの活動であったが、保護者も一緒に興味を持って下さったこと、そして保護者自身が学生の発表を楽しんで下さったことがうかがえる。コロナ禍でなかなか体験できなかった「子どもと保護者が同じ空間で一緒に楽しむ」時間が持てたことは、スタッフにとっても感慨深いものであった。

d. 本学科のオンラインミニ子育て支援講座、オンライン特別企画を見たことがあるかどうか

こどもまつり来場者に、前掲のオンラインミニ子育て支援講座、オンライン特別企画を見たことがあるかどうかについて尋ねたところ、7名全員が「見たことがない」と回答した。この結果、および前述 a のようにインターネット上の情報を得ておらず、こどもまつりの対面来場者とオンライン子育て講座の視聴者は、異なるグループに属していることがうかがえる。

本学科のオンラインミニ子育て講座、オンライン特別企画は、大学のwebサイト内にあるが、現在の構造では、ホーム（トップページ）から当該ページまでたどり着くのがなかなか難しい。それゆえ、光華こどもひろば来場者には、直接オンラインミニ子育て支援講座、オンライン特別企画の視聴をお勧めするとともに、ホーム（トップページ）から、保護者が「子育て情報」にアクセスしやすい方法を検討していきたいと考えている。

(6) こどもまつり開催の意義

2回目の緊急事態宣言が解除されたタイミングで開催し、1年ぶりに親子を迎えることのできたこどもま

つりであった。学生による企画で準備を重ね、クマのぬいぐるみを広報活動に登場させるなど、共々に開催に向けて士気を上げてきた。はじめて導入した web 申し込みは9日間で定員に達したことからも、子育て中の親子が集う場の再開が求められていたことが察せられた。当日参加の親子にも概ね楽しんでもらった。

こどもまつりの対面開催のために、感染予防を講じた上、という制限のもとでの保育環境設定の見直し、受付業務の簡素化を図り、子どもたちに楽しんでもらえる企画内容の吟味と運営にあたった。この経験は教員にとって、また学生にとって、貴重であった。今後も続くアフターコロナ下での、新しい子育て支援事業の実際を構築していく上での基盤になると考えるからである。

V. 考察

コロナ禍という閉塞した状況が続く中、筆者らには、本学科で行う地域子育て支援事業を途絶えさせてはならない、という意味が明確にあった。それは、保育者養成校には、子育て支援を視野に入れた保育者を育てていく責務があるからである。保育者というのは、子どもと関わり、子どもと共にある家族とも直接的、または間接的に関わることによって、社会に貢献する者である。本学科の場合、短期大学部時代からこれまで、右京区内の要請も受けながら少しずつ保育者養成校としてなすべき子育て支援の方法を探りつつ積み上げてきた。保育者養成校が行う地域子育て支援は、地域の子育て世代のためであり、学生の教学のためなのであるが、光華こどもひろばのような親子と学生が集まる場で、相互に交流を持つことによって、相互の育ちあいがなされていたのであった。

コロナ禍でも途絶えさせてはならない、ということは、つまり、活動実績をゼロにしないということであった。そこで、上記で報告してきたようなオンラインによる子育て支援活動を2020年度は実施した。また同時に、対面再開催に向けた検討を行った。以上の実践を整理したい。

(1) オンラインによる子育て支援活動の実施

活動内容としては、オンラインミニ子育て支援講座、オンライン特別企画、ベルの話、動画による子育て交

流会であった。これらの活動を、a.2019年度までの活動内容を基にした子育て支援活動の模索、b.新たな子育て支援活動の創出、c.学生の活躍、のポイントで、考察していくことにする。

a. 2019年度までの活動内容を基にした子育て支援活動の模索

保育実習室での光華こどもひろばは、そこに参加する親子、学生にとって、一定、居心地の良い時間、空間になっていた。2020年度、代替えとしてオンラインで行う場合、そのような雰囲気のままに、子育て支援活動を配信したいと考えた。内容についても、これまでと大きく変化させてはいない。在宅で親子が特別な材料を手配することなくすぐ遊べる遊びの紹介、保育実習室でも楽しんだことのあるわらべうたの紹介、これまで特別企画として出演していただいたゲストによるオンライン特別企画の配信であった。また、子どもたちにも人気のクマのぬいぐるみのベルを登場させたお話や動画の作成配信を行い、子育てのお話を伺う子育て交流会も録画視聴の上、感想カードを送る形で実施した。それぞれに、内容の精査と録画撮影にかかる技術、録画ならではの緊張感と配慮が必要であり、容易な活動ではなかったが、決して霧中のことではなく、成果を臨みながら取り組むことができた。このことは、コロナ禍のような非日常事態にできることは、それまでの日常の活動を基にして成されるものであることを示している。資料としてあげた東京家政学院大学、共立女子大学の子育て支援活動についても同様のことが読み取れ、日常の活動の吟味度と継続度が、非日常事態における実践の底力として生きてくることがわかる。

b. 新たな子育て支援活動内容の創出

普段の活動を基盤に、代替え活動がなされたのであるが、一方、オンラインで発信するにあたり、活動内容の検討の中、新たな内容展開法として実施したものもある。オンラインミニ子育て支援講座の「つくって遊ぼう」がこれにあたる。光華こどもひろばでは一斉集団指導を行っていないため、制作活動は1コーナーで興味を向けた親子が取り組むことになる。参加の子ども年齢が小さいこともあり、お絵かきやシール貼りといった簡単な制作コーナーを設定することが多

い。七夕の季節に笹飾りを作ろう、または、こどもまつりの際にコマやお面を作るコーナーを設定することもあるが、親子が学生と一緒に作って楽しむ、というコーナーであり、作り方の手順を詳細分析的に理解した上で提示する場にはなっていない。今回、「ゆらゆらペットボトルおもちゃ」と「びっくりたまご」の作り方を配信するに際し、そのプロセスの確認と、素材の提示法、提示の順番を、オンラインで見ている親子にとってわかりやすく、という視点で検討を重ねて、実践した。動画撮影に際して、教材研究を集中的に行ったことは、今後、新たな子育て支援活動内容を創出する原動力となるであろう。

c. 学生の活躍

オンラインミニ子育て支援講座の動画撮影に関わった学生、オルゴールサロンや紙芝居資料館へ取材・撮影に行った学生、クマのぬいぐるみのベルの声を演じた学生、動画による子育て交流会でインタビュアーを務めた学生は重要な役割を果たした。動画、または録音し、その姿、声をオンラインで発信するのであるから、親子にわかりやすく楽しんでもらえるように、下級生に理解してもらえるように、リハーサルを重ねて臨んだ。

2020年度の本学科の子育て支援活動に直接かかわったこれらの学生は、一部の学生であったという限界はある。これまで、1年生後期、2年生前期に幼児教育コースの全学生が光華こどもひろばで保育参加をしていたことと比べると、その学修機会の保証に関して課題は残る。2020年度のこれらのオンラインによる子育て支援動画を、広く学生が視聴し、学習の参考に用いていけるようにしたい。

(2) 対面再開に向けた検討

オンラインによる子育て支援活動を実施しながらも、対面再開に向けて検討を重ねた。参加人数の見直し、保育環境設定の見直し、感染予防策が主なテーマであった。なかでも参加人数の見直し、つまり定員を設定することは、これまでも見直しの必要性を認識しながらも実施を先延ばしにしてきたことであった。誰でも自由に参加できるひろば型の利点がある光華こどもひろばであったが、感染予防策をとって対面再開するには、密にならない人数での定員を設定する必要

があった。こうして参加人数に関する検討と定員設定の判断は、コロナ禍がきっかけとなってなされたのである。

そして、密にならない人数の参加者の動線を想定すること、おもちゃや器具の共用をなるべく避けるような環境設定について考え準備をすることが必要となったのである。

まだまだ制限の多い中での対面開催である。それでも、対面開催ができることは、子育て支援として地域貢献できることであり、学生にとって貴重な経験となる。保育実習室に子どもたちを迎えることは、保育者養成校に笑顔と元気をもたらすものなのである。

最後に：2021年度～今後の在り方

以上、2020年度の活動と対面開催に向けた検討を報告してきた。そして、現在は2021年度の活動を実施中である。限定した定員での参加者で対面開催をしてみると、2019年度以前の参加者より大幅に少なくなった印象を受ける。申し込もうとして、定員に達しているため参加できなくなっている親子もいるだろう。ニーズを持ちながらも参加が叶わない親子が、コロナ禍、アフターコロナの状況で少しでも気持ちを楽にして子育てをしていってほしい。保育者養成校で行う地域子育て支援の責務として、対面開催を充実させていくとともに、オンライン子育て支援講座を配信することも、継続させていかなければならないと考えている。

また、対面開催というのは、感染予防策を講じて行わなければならない。その重荷を負いながら、開催準備するものの、再三の緊急事態宣言で開催中止となることも相次いでいる。その際の、準備者の落胆は大きい。それでも、地域の子育て世代のために、次の機会の開催を念じて、学生と共に準備を続けていくのである。この歩みこそ、保育者養成校の存在意味を確認する時なのである。

付記

2020年度の光華こどもひろばは、「光華子育て支援かがやき隊」として右京区まちづくり支援制度の支援を受けて運営した。有意義な活動であったことを報告

し、感謝申し上げます。

謝辞

2020年度「光華こどもひろば」の広報に関して、
 本学地域連携推進センターおよび入学・広報センター
 に情報提供と協力をいただいた。感謝申し上げます。

注

- 1) 京都光華女子大学 2018年度特別研究「保育者養成校における地域子育て支援事業実施と学生の学び」(研究代表：和田幸子、研究協力：伊藤美加・下口美帆・田中慈子・智原江美・永本多紀子・松本しのぶ・山崎玲奈)として行った。
- 2) 2016年度右京区まちづくり支援制度の支援を受けて行った。
- 3) 日本保育者養成教育学会第5回研究大会(2021年3月4日、大妻女子大学、オンライン開催)において、和田幸子「コロナ禍での子育て交流会開催と学生の学びについて」として報告している。

引用文献

- 泉健(1996)「わらべうた—変わりやすいものと、変わりにくいもの」櫻井・山口共編『音の今昔』弘文社 p.43
- 入江礼子・小原敏郎・白川佳子編著(2017)『子ども・保護者・学生が共に育つ 保育・子育て支援演習～保育者養成校で地域の保育・子育て支援を始めよう～』萌文書林. p.23
- 小島美子(1969)「わらべうたの音楽的要素」『音楽教育研究』11. pp.13-25
- 小島美子(1983)「わらべうた」『音楽大事典』5. 平凡社. p.2858
- 柳瀬洋美・白川佳子・小原敏郎・吉永早苗(2021)「コロナ禍における大学発『地域子育て支援』の果たす役割Ⅰ—2020年度『子育てひろば』活動の実践から—」『日本保育学会第74回大会発表論文集』. pp.549-550
- 横山真貴子(2009)「紙芝居」中坪史典編『児童文化

がひろく豊かな保育実践』. pp.38.

和田幸子・智原江美・鍋島恵美・下口美帆・田中慈子・山崎玲奈(2015)「保育者養成校内で行う地域子育て活動『光華こどもひろば』の実践と考察」『全国保育士養成協議会第54回研究大会研究発表論文集』. p.180

和田幸子(2020)「学内子育て支援の保育参加を経た子育て交流会の実施」『日本保育者養成教育学会第4回研究大会抄録集』 p.91

